

昭和20年8月16日・第128震洋隊 (手結基地)の悲劇・111名の犠牲



(1) 震洋艇=suicide launch(意味は自殺ボート)

太平洋戦争末期、戦局が悪化していくなか、起死回生を狙って旧日本軍が開発した最後の特攻兵器「震洋」。緑色に塗装し、250kgの爆薬を積載し、耐水性のベニア板で造られたボートであり、敵の戦艦に体当たりすることがその任務であった。土佐清水市越地区の西牧山北麓にその格納壕が残り、第132震洋隊171名がその任務に当たっていたことを前号に詳しく書いた。この震洋の船隊の現物は、オーストラリアの首都キャンベラにある戦争博物館に現在も大切に保存されている。終戦直後に北ボルネオのサンダカンで発見され、オーストラリア軍によって回収された一隻である。博物館では、英語で「Japanese suicide launch(意味は自殺ボート)」と表示されている。

(2) 第128震洋隊(手結基地)と終戦の捉え方・意識

沖縄戦が始まっていた5月頃、第128震洋隊特攻隊員は、170名が配属された。彼らが終戦の翌日に大爆発に遭遇するのである。彼らのほとんどは、特攻隊を夢見ていた10代の飛行予科練生たちであった。しかし、当時飛行機が不足、そこで旧日本軍は、彼らを震洋の特攻隊員として転用したのである。

昭和20年8月15日にラジオで玉音放送が流れる。敗戦が昭和天皇により宣言された。その晩は、特攻隊員の中には悔しくて精神的に大荒れの人が多くいたという。

東京都目黒区の防衛研究所戦史部に保存されている「大海令」(海軍の最高統帥機関・大本営海軍部の命令)第48条には、「停戦交渉成立の間、敵の来攻にあたり、やむを得ず自衛のための戦闘行動はこれを妨げず」とある。つまり敵が侵攻してきたときは戦えという命令である。この命令は、全国の突撃隊本部に打電され、周知された。これは8月16日が海軍にとってまだ戦争が終わっていなかったという証拠である。

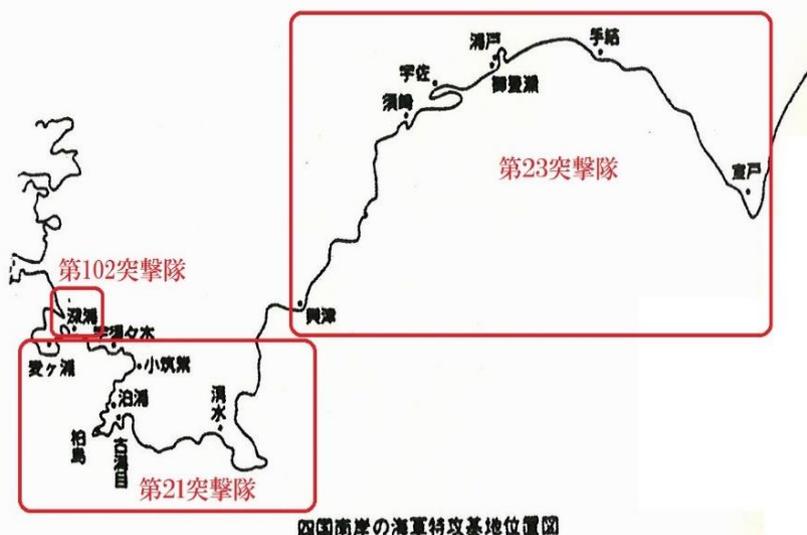
(3) 昭和20年8月16日(終戦の日翌日)に住吉海岸で何が起こったのか？

8月16日、高知県夜須町(現在の香南市手結)の住吉海岸で第128震洋隊の特攻隊に第23突撃隊突撃隊本部(現在の須崎市設置)に「土佐沖に敵艦群見ゆ」との情報をもたらされた。この情報に基づき特攻の第一配備の命令が、第128震洋隊にも発せされた。この情報は実は誤報であった。アメリカ合衆国公文書館資料によると、8月16日に米軍艦隊は房総半島沖と沖縄に配備されており、土佐沖には存在していなかったことが分かっている。

命令に従い、隊員たちは出撃に備え、意識を高揚させつつ準備にかかる。夕方18時頃、格納壕から25隻の震洋艇を取り出し、沖に向け、それを海上に並べようとしていた。輸送するためのスロープは1箇所だけであり、一艇ずつ運び出され、それを海上に移送しようと作業を進めていた。海に一番近い1号震洋艇のエンジンをかけていたところ、にわかにバックファイアーにより出火する。これを消火したと思い、1号震洋艇をさらに移送して海上に動かしていた途中、それが爆発。誘爆が次々と起こる可能性があったため、特攻隊員たちは近くの防空壕などに一旦非難した。そんなとき上官から全員集合の命令が下った(集合命令は全員集合して消火せよとの意味か?)。しかし、その後20隻ほどの震洋艇が次々と誘爆を起し、大爆発・大炎上が地獄絵巻のように広がった。特攻隊員や本部隊員、整備員など111名が死亡する悲劇が発生したのである。

その前日、既に戦争は終わっているはずだった。にもかかわらずなぜこのような大事故が発生したのだろうか。当時を知る人も少なくなり、事の真相が謎になりつつある。この悲劇をあらためて検証し、後世まで語り継ぐことが重要である。

これが亡くなった方々への供養となり、戦争の真実の実相を次代に伝えることにつながると思う。ゆえに歴史を学ぶことの意味は極めて大きい。



四国南岸の海軍特攻基地位置図

【編集後記】

第132震洋隊(土佐清水基地)の艇格納壕は、市史編集委員・出原恵三氏と市史調査協力員・大原純一氏によって測量調査がおこなわれ、聞き取り調査とともに、令和4年度末に刊行される『新・土佐清水市史』にしっかりと掲載される予定です。原稿と測量図は、今、出原氏、大原氏によって着々と作成・記述されています。乞うご期待! 私事、第128震洋隊の事故現場や慰霊碑にまだ私は、行ったことがありません。近いうちに歴史仲間を誘って一度訪問し、現場の確認やお線香を手向けてきたいと考えています。111名の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。